

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 大企業が市場を寡占している。
- (2) 流れた汗を拭う。
- (3) 厳かな雰囲気。
- (4) 両者の意見を折衷する。
- (5) 辛酸甘苦を味わう。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 代表作をシヨシユウした書物。
- (2) テイサイを保つ。
- (3) タダちに集合する。
- (4) 先人の虎のマキを読む。
- (5) 自然の営みはセンコフエキだ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

千間学院高校（通称「千学」）の卒業生である不破瑛太郎は、低迷している吹奏楽部を立て直すためコーチとして母校に戻ってきた。一年生の茶園基は、全日本コンクールで活躍していた時代の瑛太郎を小学生の頃テレビで見知っていた。コンクールを前に、基は部員の堂林と一緒に瑛太郎に呼び出された。

「君等はさ、千学の吹奏楽部をどう思う？」

テーブルに両手をつけて、こちらを見下ろす。

「千学は、全日本コンクールに行けると思うか？」

獲物を見定める獣のような目だった。瞳の奥で、⁽¹⁾こいつ等は自分が狩るに足る存在なのかどうか、吟味している。

「駄目だと思います。」

気がついたら、そう口が動いていた。

「瑛太郎先生が来て、みんなやる気が出たみたいに見えました。でも朝練に来る人は十人ちよつとです。今が一番モチベーションが上がっているはずなのに、朝から吹こうって人があの程度しかないって、駄目だと思います。」

堂林が、ちらりとこちらを見た。

「全日本って目標は掲げてますけど、掲げてるだけってどうか。僕は先輩達から『今日は絶対にここを吹けるようになるう』っていう気合いを、一度も感じたことがないです。」

今、自分は先輩を非難している。部長として部を運営する玲於奈を遠回しに非難している。でも、ただ、この人には——不破瑛太郎には、失望されたくなかった。

「俺もそう思います。」

隣で堂林が静かに頷く。

「朝練に来てる人等も集中して練習してるとは言えないし。来るだけで満足してるのが丸わかりで毎日苛々してたんで。」

何故、自分達がここに呼ばれたのかを考えた。そして、それを言葉にした。

「埼玉県大会はただでさえ激戦なのに、今の状態で勝ち上がれるわけがないです。」

今や全日本に出場する学校はどこも上手い。特に埼玉県大会は激戦だ。埼玉県大会の上にある西関東大会から全日本コンクールに推薦される高校は、すべて埼玉県代表で占められるくらい有力校がひしめき合っている。中一、中二のときに県大会敗退、中三で西関東大会敗退を経験した基は、それをよく知っている。玲於奈だって、知っているはずなのに。

「じゃあ、君等だったらどうする？」

「え？」とか「僕達ですか？」と聞き返したくなった。⁽²⁾でも、喉の奥に力を入れて堪えた。

「多分これは、瑛太郎先生が卒業してからできてしまった悪しき風習なんだと思います。玲於奈は……部長は僕の幼馴染なんですけど、二年前、部長が入部した当初、『たるんだ空気をしゃきつとさせたい』と言ったのを覚えてるんで。」

でも結局、玲於奈が部長になっても変わらない。五十人以上の大きな組織を、一人がそう易々と変えられるわけではない。

「瑛太郎先生がコーチとして来てくださったのは、僕はチャンスだと思ってます。今なら、吹奏楽部の悪い部分をぶっ壊せるんじゃないかって。」

「へえ。」

笑いを含んだ瑛太郎の相槌に、基ははっと顔を上げた。

唇の端を吊り上げて笑うその顔を、基は小学生の頃テレビを見た。ああ、あの人が今自分の目の前にいるんだなど、肌で感じた。

「ありがとう。」

「麦茶飲んだら？」と瑛太郎が基と堂林のグラスを指さす。「はい！」と声を合わせて、二人で麦茶を飲み干した。それがおかしかったのか、瑛太郎はまた呆れたように肩を揺らした。

「瑛太郎先生に、吹奏楽部のことどう思うかって聞かれたんですけど。」
「池辺もか。それ俺も聞かれたわ。」

基と同じアルトサククスを吹く二年の池辺豊先輩と三年の越谷和彦先輩がそんな話をし出したのは、パートごとのチューニングと基礎練習を終え、個人練習に移ろうとしたときだった。

「先輩達もですかっ？」

パート練習で使っている二年一組の教室に、自分の声が予想以上に大きく響いた。

「もしかして、茶園も聞かれた？」

サククスパートのパートリーダーも務める越谷先輩が、自分の短髪を指で梳きながら「一年にも聞いたんだ。」と目を丸くする。

「一年の僕にも聞いてるってことは、先生、全員に同じことを聞いてるんでしょうか。」

「えー、何のためにだよ。」

基礎練習は車座になってやっていたけれど、曲練習は個人でやるから、教室の中で散り散りになる。その最中も、他の部員から「私も聞かれた。」

「俺も。」という声が上がった。

「今の吹奏楽部の雰囲気を知りたかったから、とか？」

言いながら、自分に同じ質問をしてきたときの瑛太郎の顔を思い出す。あの表情は、そんな生やさしいものではなかった。

「あの人、まだ猫被ってるよな。」

突然、越谷先輩がそんなことを言い出す。上背のある彼は、大きな檜

の木のような雰囲気がある。パートリーダーだけあって、パート内の長男的な存在だった。

「この一ヶ月間、瑛太郎先生は『今まで通り練習しろ』って言うだけで、自分らしさを全然出さなかった。一年生も入部して、パート分けも済んだから、いい加減何か始めるだろ。」

「何ですか、何か、って。」

「何か。超凄い修行とか。」

毎日課題曲の練習をして、合奏をして、瑛太郎から各パートや個人個人に指示が飛ぶ。この数週間、それをずっと繰り返している。それに、千学のみんなはちょっと飽きているのだ。

今日は課題曲Ⅰ『スケルツァンド』を合わせると事前に予告されているから、時間をかけて練習することにした。中間部には、アルトサククスによる美しい旋律がある。瑛太郎から「やってみろ。」と言われたら、完璧に吹きたい。

マウスピースを口に咥えようとした瞬間、背後から笑い声が聞こえた。一瞬だけ振り返って確認すると、池辺先輩と二年生の先輩が明らかに部活とは関係ない話をしていた。越谷先輩がやりわり注意したけれど、本当にやりわりだった。木のざわめき程度だった。

遠くから、きらびやかなトランペットの音が聞こえてきた。これは堂林の音だ。どうやら、理由をつけて一人で練習しているみたいだ。いっそ、僕もそうしちゃおうかな、なんて思ってしまう。ここにいたら、自分まで溶けたアイスクリームみたいになってしまいたい。

練習に集中しているうちに、気がついたら五時半近くになっていた。そろそろ合奏が始まる時間だ。楽器を抱えて第一音楽室に戻ると、瑛太郎がすでに指揮台の上に置かれたパイプ椅子に腰掛けていた。膝に頬杖をつけて、ほんやりとスコアを眺めている。

すべてのパートが集まったタイミングで、普段だったら玲於奈が号令

をかける。ところが、それより早く瑛太郎が立ち上がった。

「ちよつと教えてくれないか。」

「一音入魂！ 目指せ！ 全日本吹奏楽コンクール」という部の目標を、指さす。

「目指せ全日本、というのはわかる。でも、君等にとつての一音入魂って何だ？」

六十四人の部員を見回して、瑛太郎は言う。

「別に、全員揃って同じ答えを言えというわけじゃない。それぞれがそれぞれの込めるべき魂を持って演奏してるなら、それでいい。」

それが感じられないから、今話してるんだけどな。瑛太郎の顔にはそんな本音が書いてある。膝にやっていた手を、基は握り締めた。

「君等は、自分の頭の中に『こんな風に演奏したい』という理想はあるか。自分の音と理想を比べて、足りない部分を修正する作業を今日したか？ これから始まる合奏に間に合わせるために必死になったか？」

瑛太郎の言い方は、決してこちらを詰問するようなものではなかった。お説教されているわけでもない。強いて言うなら——ソロパートを吹いているようだった。

「全日本に出たいという目標は素晴らしいが、君達には目標があっても理想がない。闇雲に目標を追いかけて、追いかけることがマンネリ化して、モチベーションが下がってる。」

⁽³⁾ 誰も何も言わなかった。音楽室ごと、海の底にでも沈められた気分だ。音がしない。シンとした緊張感の中、誰もが瑛太郎を見ていた。みんな、心の底では同じように思っていたのだろう。面白いくらい綺麗に、言い当てられた。

「俺は三好先生から『吹奏楽部を何とかしてほしい』と言われた。それに、このまま低迷し続ければ、部も今まで通りに活動できないだろう。」
最前列で、玲於奈がすつと手を挙げた。瑛太郎以外、誰も口を利かな

かった音楽室に、「先生」という凜とした声が響く。

「今まで通りに活動できないって、どういう意味ですか。」

「吹奏楽部は学院の強化指定部になってる。例えば第一音楽室は実質うちの専用練習場で、授業で使うのは隣の第二音楽室のみ。予算だって他の部より多い。コンクールの遠征費や楽器を買う予算は、部費だけじゃ賅えない。学院に実績が認められて、頑張れと言ってもらえているから、君達はこうやって活動できている。」

「じゃあ、全日本に出られなかったら強化指定部から外れるってことですか？」

玲於奈が続けてそう聞くと、瑛太郎ははっきりと頷いた。

「六年だ。もう六年、千学は全日本に出ていない。それが長いか短いかは俺が判断することじゃない。ただ学院は『長い』と判断した。三好先生も体調が優れないし、顧問を替えて、今後はコンクールに出場しない方針になるかもしれない。それなら朝から晩まで練習する必要もないし、君達は勉強に専念できる。大学合格実績が上がって学院は万々歳。吹奏楽部が使っていた予算を、活躍している他の部に回すこともできる。」

瑛太郎は《かもしれない》と言った。でも、仮定の話だと受け取った人間はいないだろう。

「というわけで、俺はコーチとして君達を全日本に連れて行かないといけない。君達もこの通り全日本を目標としてる。目標は一致してるわけだ。お互い頑張ろうじゃないか。」

やっと瑛太郎の口元が笑った。⁽⁴⁾ とてもじゃないが、基は頬を緩めることができなかった。

「一ヶ月考えたんだが、まずは一度、この部をぶっ壊すところから始めようと決めた。」

突然、瑛太郎が指揮者用の譜面台に置いてあった指揮棒を取った。条件反射で首から提げたアルトサックスに手をやってしまう。

その白く鋭い切っ先は、何かの輪郭をなぞるようにして空を搔き――
基を差した。

「手始めに、部長を一年の茶園基に替える。」

瑛太郎の声は、時を止める魔法をまもっていた。静まりかえった音楽
室で、基は気がついたら立ち上がっていた。

サックスのベルが譜面台に当たり、倒れる。音を立てて楽譜が周辺に
散らばった。

「茶園。」

呼ばないでくれ。頼むから、いつか僕を魅了した声で、僕の名前を呼
ばないでくれ。

「一緒に全日本吹奏楽コンクールに行く部を作ろうか。」

今度こそ、瑛太郎が笑った。目の奥をきらりと光らせて、彼が高校三
年生のときのように。全日本吹奏楽コンクールに出場したときのように。

「はい。」

口が勝手に動いた。

(額賀滯「風に恋う」による)

〔問1〕⁽¹⁾ こいつ等は自分が狩るに足る存在なのかどうか、吟味している。

とあるが、この表現から読み取れる「瑛太郎」の様子の説明として
最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 新入部員である基と堂林が、瑛太郎の期待に応えようと本心に背いて
まで仲間を批判する人物かどうかを見抜こうとしている様子。

イ 実力がないためコンクールの選抜メンバーから外れることを、新入部
員である基と堂林にどのように伝えるかを考えている様子。

ウ 全日本出場を目指すに値する覚悟や吹奏楽部の現状を把握する力が、
基と堂林にどの程度あるのかを見定めようとしている様子。

エ 基と堂林が、瑛太郎から失望されないようにするために毎日何を心掛
けて練習しているのかを間接的に聞き出そうとしている様子。

〔問2〕⁽²⁾ でも、喉の奥に力を入れて堪えた。とあるが、なぜか。その理由
として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 基は瑛太郎の質問の意図が分からなかったが、中学時代の苦い経験を
元に自分の思いを伝えたら評価されるかもしれないと期待したから。

イ 基は吹奏楽部が抱える問題の解決策を考えていなかったため、堂林と
意見を比べられたら瑛太郎に失望されるかもしれないと動揺したから。

ウ 基は瑛太郎の思いがけない質問に驚きつつも、別の言葉ではぐらかす
ことなく吹奏楽部に対して抱いていた本当の思いを伝えなかったから。

エ 基は全国で活躍できる可能性を感じてはいるが吹奏楽部の現状に落胆
しており、心に秘めている悩みを瑛太郎に伝えようと決めたから。

〔問3〕⁽³⁾ 誰も何も言わなかった。とあるが、なぜか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 今までの目標や努力を瑛太郎に否定され、黙認したくないという思いが込み上げてきたため反論する機会をうかがっているから。

イ 瑛太郎に指摘され改めて自分たちの吹奏楽に対する姿勢の甘さを認識し、反論する余地もなく瑛太郎の次の言葉を待つしかないから。

ウ 瑛太郎からの指摘は的外れで心外であったが、自分達がふがないことには変わりはないため全日本出場を諦めざるを得ないから。

エ 瑛太郎に吹奏楽を続けていく上で大切な思いについて問われ、自分達の行いを反省しながらも心の奥底では納得できずにいるから。

〔問4〕⁽⁴⁾ とてもじゃないが、基は頬を緩めることができなかつた。とある

が、この表現から読み取れる「基」の様子の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 瑛太郎が掲げる目標を実現することは部にとって理想ではあるが、過程における困難さを思うと安易に同意はできず葛藤している様子。

イ 瑛太郎が自分を部の責任ある立場に指名しようとしていることを予期し、使命の重さを感じて不安に押しつぶされそうになっている様子。

ウ 瑛太郎が部の現状を改めようとするには無理があると感じ取り、部員から出てくる反発をおそれ体が硬直している様子。

エ 瑛太郎が自分と同じ目標を実現させようとしていることを喜び、全日本を目指していない部を何とか立て直そうと意気込んでいる様子。

〔問5〕 本文の表現や内容について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 部員を多く登場させ一人ひとりの人物の心の動きを細やかに描くことによって、物語のもつ世界観を多面的にかつ重層的に表現している。

イ 中学時代の回想を随所に散りばめ時系列を入れ替えることにより、読者が物語の設定を理解し登場人物に共感できるように表現している。

ウ 基の視点から見た世界を描写することで、瑛太郎との間に広がる溝に寂しさを感じながら状況により揺れ動く高校生の心情を表現している。

エ 部員の会話を多く用いて具体的に様子を描くことで、読者が登場人物同士の関係性や部の雰囲気や自然に感じられるように表現している。

〔問6〕 次の会話は、本文を読んだ後の国語の授業の様子である。あとの「i」「ii」の間にそれぞれ答えよ。

生徒A…この作品は、色々な表現の工夫があつて面白く読めたよね。表現についても少し深めていこうよ。

生徒B…いいね。たとえば、「大きな檜ひのきの木のような雰囲気」という比喻表現があつたね。越谷先輩が穏やかな性格であるということが伝わってくるよね。

生徒C…私は基が「1」と感じた場面が印象的だったな。この比喻表現によって、部活のだらけた雰囲気に対する危機感が伝わってきたよ。

生徒A…そうだね。私は、「2」という一文にも、比喻表現が効果的に用いられていると考えたよ。基にとって瑛太郎の言葉は、無意識に反応してしまうほどの大きな力をもっているのだと思う。

生徒B…うん、そうだと思う。比喻表現以外にも、表現の工夫を感じたな。「今度こそ、瑛太郎が笑った。目の奥をきらりと光らせて、彼が高校生こうせいのときのように。」では倒置法が使われているよね。

生徒C…私は最後の場面が気になった。「サックスのベルが譜面台に当たり、倒れる。音を立てて楽譜が周辺に散らばった。」という箇所は、3 表現だと思ったよ。

〔i〕 生徒の会話中の1・2に当てはまる一文を本文中から1は三十五字、2は二十二字で探し、始めの五字を抜き出せ。

〔ii〕 3に当てはまるものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 緊張感のある音楽室で慌ただしい音を描写することによって、部員が抱く基への不信感を明確にしている

イ 静かな空間で譜面台が倒れる様子を描写することによって、予想外の部長指名に動揺する基を印象的に描いている

ウ 譜面台を意図的に倒した様子を描写することによって、思い通りに行かない現実に対する基の怒りを強調している

エ 楽譜が床に散乱している様子を描写することによって、基と瑛太郎の関係性が崩壊したことを暗示している

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

【第一段】

*トマセロは「道徳性」をヒト独自の協力形態とみなし、二つに分類している。

一つは「同情の道徳性」であり、これは「sympathy」の道徳性なので、共感が深く関わっている。共感によって慈悲、あわれみの感情が生じ、他人を助けようとするのが、この道徳性の特質と言える。二つめは「公平の道徳性」で、これは正義と平等、公平性を求め、全員が利益を得られる方策を探そうとする道徳性である。

人類が身につけた最も原初的な道徳性は「同情の道徳性」であり、この道徳性は幼児や類人猿にも見ることがができる。その進化的源泉は子供に対する親の世話にあり、これは哺乳類全てに当てはまるのだ。特に類人猿は生存と繁栄のために同一集団の仲間へ依存し、資源を得るために協同するが、そうした向社会的行動は、同情、共感によって動機づけられている。

たとえば、チンパンジーはグルーミング（毛繕い、ノミ取り）の際、オキシトシンが増加していることがわかっており、これは「嬉しい」「楽しい」と感じる場合に分泌されるホルモンなので、援助行動の際に同情を感じている証拠と言われている。

一方、公平や正義に関心を持つには、互いに依存しているという感覚が必要であり、類人猿が「公平感」を備えているという証拠は存在しない。トマセロによれば、「行動レベルでの類人猿の互恵的*パターンは、暗黙の合意や互恵性の契約などによらず、ましてや公平や平等の判断によるものなどではなく、相互依存に基づき双方向に作用する同情だけに支えられているのである」（『道徳の自然誌』）。

人間の道徳性も同情が根底にあり、それは幼児期の早い段階で現われる。ただ、人間の場合は「同情の道徳性」だけでなく、進化の過程で「公平の道徳性」をも持つようになった。これはチンパンジーなどの類人猿には見られない。「協同」の段階から「文化」の段階を経て、ヒト独自の協力が生まれ、戦略的協力から真の道徳性へ進化したのである。

ヒトの道徳性はその大部分が、広い意味において、友達や家族を含む特定の他者に対する同情に基づいているからである。ヒトは道徳性のこの次元を置き去りにしてはいない。同情するからというだけでなく、そうすべきだと感じるからという理由で、それほど親密でないさまざまな相手に対して配慮と尊敬を持てるのは、こうした萌芽^{ほろが}的道徳性の上に、新たな形態の道徳性を発展させてきたからに他ならないのである。（同上）

こうした人類における道徳性の進化について、トマセロは、「初期ヒト」⇓「現生ヒト」⇓「現代ヒト」という段階に分け、幼児の発達と比較しながら論じている。では、人類の道徳性の進化と個人の道徳性の発達は、具体的にはどのように関わっているのだろうか？

【第二段】

四十万年前に現われた「初期ヒト」（ホモ・ハイデルベルゲンシス）は、仲間と協力しなければ飢え死にする状況に追いやられていた。寒冷化、乾燥によって、大型の協同狩猟を試みるようになっていたのだ。やがて彼らはより利益を得るために、血縁の家族や友達にのみ生じていた同情（共感）を拡大し、協力し合う仲間にも同情するようになり、それが道徳的な意識を芽生えさせることになる。つまり、自分の利益を超えて、相手を助けたいという思いを抱くようになったのだ。

これは現代の幼児にも同じことが言える。

幼児が共感によって他者を援助するのは、利益を得るためというより、助けたいという思いからであることは、各種の心理学的実験によって明らかになっている。また、以前に危害を加えられた経験がある幼児は、相手へ感情移入し、より積極的に相手を助けようとする。これは相手の立場に立って考えられることを示している。

やがて初期ヒトは協同活動を調整するため、共同志向性を持つようになった。相手と共同の目標を追求し、責任のある約束をするようになったのだ。ちなみに、幼児は一歳から他者と共同の目標を共有し、十三か月になると、大人と協同作業をしている時、相手が何の理由もなくやり取りをやめると、指差しなどで、相手に協同作業を再開させようとする。共同志向性は、初期ヒトに友情を超えた社会関係を作り出し、公平性の起源となったのである。

他者との協同作業に際しては、相手の役割・視点に立って想像し、相手が自分の役割・視点をどう想像しているかを想像しており、自分と相手を等価な存在として意識している。この自他等価性の認識は、相互の尊敬を生み出すことになる。協力する二人（二つの「私」）は、共同主体として行動する「私たち」という意識を持つようになり、協同活動においてお互いを等価だと認識するようになった。お互いを助け合うための動機を持つようになったのである。

こうして、初期ヒトは「私たち」の間で交わした約束に従い、相手に協力的に接する「べき」だと感じるようになった。お互いのなすべき役割を認識しているため、相手の敬意のない行動には抗議するし、自分の役割と行動には責任を持つ。⁽¹⁾三歳児が別の子のオモチャを不注意で壊すと、努力して修理しようとするものだが、これも初期ヒトと同じ責任感からの行動と言える。お互いにより依存するようになった結果、「公平の道徳性」が生まれたのである。

純粹に戦略的な理由から他者と協同していた初期ヒトは、最初、自らの利益を促進するための「社会的道具」として他者を捉えていた。しかし時が経つにつれ、同情は仲間拡大され、続いて、参加者の誰もが担うべき役割を想定できるようになった。これは自分と他人の等価性を認識していることを意味しており、これによって相互に尊敬が生じ、互いの価値が確認されるようになったのだ。

トマセロはこのような存在を「二人称の主体」と呼んでいるが、それは協同作業に対する約束を作り出し、この合意によって自制することが可能になった主体である。二、三歳児が不平等な扱いに抗議するのも同じことであり、相手と対等だと感じていたからそうなのだ。しかし、自分に直接関係のない第三者のやり取りに介入したりはしない。これが「二人称の道徳性」であり、「私」と「あなた」が対面でやり取りする際の二者間の道徳性なのである。

このように、初期ヒトの到達した二人称の道徳性は、類人猿にも見られた「同情の道徳性」を超えて、「公平の道徳性」に足を踏み入れている。しかし、その公平性は二者間、あるいは顔の見える身近な人との間のみ成り立つ、限定的なものであった。⁽²⁾本格的な「公平の道徳性」が開花するには、「現生ヒト」（ホモ・サピエンス）の登場を待たなければならなかったのである。

【第三段】

十五万年前に現われた現生ヒト、つまりホモ・サピエンスは、他の集団との争いにより、所属集団への同一化を強めていた。集団と自身を重ね合わせ、集団の生存と幸福のために分業された役割を果たしていたのだ。そこには、同じ文化に属する人に対する特別な同情の感覚、共感と忠誠があり、部外者は競争相手であり、集団の利益に相応しくないと考えられていた。

現生ヒトは、行動や外見が似ている集団内メンバーに連帯を感じ、文化習慣を共有することで、集団への忠誠心を維持していた。また、初期ヒトは協同作業の相手を等価とみなしていたが、現生ヒトでは集団全員を等価とみなしており、それは相手と視点を交換する初期ヒトの能力が、客観的視点へ変化したことを意味している。つまり、公平や正義の判断に必須の視点が形成されたのである。

さらに、集団の規模が大きくなったことで裏切りが増え、二人称の直接的な抗議では制御できなくなったので、社会規範によって処罰するプロセスが習慣化した。二人称の相手に対する責任感、文化集団の価値に対する幅広い義務感へと変化し、正しいことをすべきだという感覚が生まれたのだ。こうして現生ヒトは利己的動機を乗り越え、社会規範に基づいた客観的視点から自分自身を評価するようになった。

やがて社会規範への同調は幾何級数的に増加したが、社会規範の異なる集団の間で公平感に差が生まれるようになった。トマセロによれば、幼い子供ほど文化が違っても公平感に差が見られないのは、子供がまだ自然な二人称の道徳性に従っているからだ。しかし成長するに従い、公平な形で資源を分配するやり方は、社会規範から判断すべきだと感じるようになる。

たとえば、自分の兄と同じ量のおやつを欲していた幼児でも、長男のほうがより多くおやつを得る権利がある、という文化の中で育てば、やがて兄のほうがおやつが多くて、不平を言わなくなるだろう。現生ヒトは文化世界で生き残るために、集団の文化習慣、社会規範に同調し、社会規範が示す善悪の価値を妥当なものとし、みなすようになったのだ。

こうして人間は文化習慣、規範、制度を作り出し、文化・集団を重視する道徳性を身につけるようになった。二人称の道徳性を文化生活、社会規範に合うように修正し、社会規範に共感するようになったのである。

(山竹伸二「共感の正体」(一部改変)による)

〔注〕トマセロ——アメリカの比較発達心理学研究者。

互恵的——互いに相手に利益を与え合うこと。

幾何級数的——急激なさま。

〔問1〕【第一段】の内容について述べたものとして次のうちから最も適切

なものを選べ。

ア 哺乳類は、互いに利益を得られる方策を探そうとする道徳性を先天的に備えている。

イ 類人猿は人類と同質の、互いに依存している感覚に基づく道徳性を身につけている。

ウ 人類は類人猿よりも早い段階で、「同情の道徳性」と「公平の道徳性」を同時に獲得する。

エ チンパンジーのグルーミングは、共感に基づき相手を助けようとする心が根底にある。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、「 」内は現代語訳を補ったものである。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

*かねねらぶたのあ 金沢貞顕かねねらぶたのあと関わりを持ちながら、当時の唐物ブームに水を注すした一人の人物がいる。それは、ほかならぬ『徒然草』の作者である吉田兼好である。兼好は貞顕を頼って、鎌倉に滞在したことがあったらしい。貞顕が六波羅探題として上京していた折に、兼好は面識を得て、そのついで鎌倉には少なくとも二度下ったことがわかっている。その時、兼好は金沢氏の館に近い上行寺じょうこうじの境内いんぢに庵いぢを結んだと伝えられている。

上行寺や金沢氏の館に近い六浦むつらの港は、塩あの産地であるとともに、鎌倉中期から国内外の物資が陸揚げされる、幕府にとって重要な港であった。兼好が六浦で唐物が大量に荷揚げされるのを見て、⁽¹⁾『徒然草』の次のような段が生まれたという伝説さえあるのである（百二十段）。

唐の物は、葉の外は、なくとも事欠くまじ。書かみどもは、この国に多くひろまりぬれば、書きも写してん。唐土舟もろこしふねのたやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狭く渡しもて来る、いと愚かなり。

⁽²⁾「遠き物を宝とせず」とも、又「得がたき貨たからを貴たかむまず」とも、文に待るとかや。

（中国からの舶来品は、葉の他はなくても困らないものばかりである。中国の書物なども、この国にじゅうぶん広まっており、書き写すだけで良い。中国からの交易船が、たやすくはない遠い道のりを、無用のものばかり所狭しと積みこんでやってくるのは、まことに愚かしいことである。）

「遠い国のものを宝にするな」とも、また「手に入りにくい宝物を貴ぶな」とも、中国の古書には書いてあるとか。）

兼好はこのように当時の唐物ブームに冷やかで、葉以外の唐物は不要なもの、唐船が実用にならぬ贅ぜい沢品たくみんばかり輸送しているのは、ばかげたことだとしている。『徒然草』の十三段では、『文選』⁽³⁾『白氏文集』『老子』⁽¹⁾『莊子』など漢籍を評価している兼好だが、この段では書籍ならばすでに日本にたくさん輸入されているので、これ以上、輸入しなくても、これまで招来された本を書き写せばよいとしている。兼好は金沢家の書庫いに集められた和漢の書まをみることを目的に東下りしているので、書籍の輸入に対して寛容かと思いきや、そうではないのである。

この段の「唐の物は」以下は、日元貿易の実態を示す資料としても、しばしば引用される有名な段だが、兼好は舶来品をむやみにあり難がたがる鎌倉末期の風潮を苦々しく思っていたらしい。もともと舶来の葉だけは、日本では入手できないものがあることや、健康を重視する立場から例外としたのであろう。

最後の「遠き物を宝とせず」の一節は、『書経』⁽²⁾の「旅獒」の引用で、これは君主が遠方のモノを宝としてほしがらなければ、土地を侵略される心配がないので、その土地の者は安心していられるという意味である。「得がたき貨を貴まず」は『老子』の引用で、君主が珍しい財貨を、貴重なものとして扱わなければ、民は盗みを働かないということを意味する。いずれも「唐物」をもてはやす階級エの人々ではなく、為政者を批判の対象とするが、民がその影響を受けて心を乱すことへの警句にもなっている。ただ遠方からきたからだとか、珍しいからだとかいって、あり難がってはいけなないと昔の本には戒めていると、兼好は醒めた調子で書いているのである。

また、つづく百二十一段の「養ひ飼ふものは」でも、兼好は、牛、馬以外の鳥獸は養つても無用なものとして、同じく『書経』の「旅獒」の一節を引いている。「凡そ、「めづらしき禽とり、あやしき獸けだもの、国に育はず。」

とこそ、文にも侍るなれ。」(一般的にいつて、「珍しい鳥や、変わった獣は、国内に飼育すべきでない。」と中国の古書の中にも書いてある。)と戒められているのである。

ところで、『徒然草』にさかのぼること約百年前になるが、かの藤原定家も日記の『明月記』の嘉祿二年(一二二六)五月の条で、「去今年、宋朝の鳥獸、華洛(京都の町)に充滿す。唐船任意の輩、面々に之を渡すか。豪家競ひて參養すと云々。」(近ごろ、中国の鳥獸が京都の町にあふれている。中国の船を思うがままにしている者たちが、裕福な人々にこれを渡したのだろうか。富裕層が競って飼っているとか。)と記した後、同じく「旅葵」の一節を引いて、「珍禽奇獸、国に育はず。遠き物を宝とせざれば、則ち遠き人、格る。」(珍しい鳥獸は国内では育てない。遠い国の品物を宝物として欲しがるのがなければ、遠くの人々も従ってくる。)と書いていた。昨今、宋朝の鳥や獸が京にたくさんいるというが、それは当時、唐船を意のままにする連中が大陸の珍獸を持ちかえり、京の富裕層が競ってそれを飼う一種のペット・ブームが起きていたというのである。

『明月記』の同じ嘉祿二年の二月の条では、石清水八幡の宗清法印から舶来の麝香猫と鸚哥が定家のもとに届けられたという記事がある。宗清は関白の近衛家実に献上するつもりであったが、その前に定家にみせたかったらしい。唐船が運んでくる宋の鳥獸が京でもてはやされ、貴顕への贈り物になったのだろう。平安期では貴族層にかぎっていたのが、定家の時代には、すでに「富裕な層に広がっていたことがわかる。『明月記』と『徒然草』の一致は偶然のことなのか、それとも兼好が定家を意識したのか、さだかではないが、定家も舶来の珍獸を飼うことに冷やかであったことは興味深い。

なお兼好の唐物や唐めくモノへの嫌悪は、『徒然草』の十段で、唐の

調度品について見苦しく、わびしいものとしている点や、百三十九段で舶来の植物についても、名が聞きとりにくく花も見慣れていないので、懐かしさを覚えなれないとしている点からも明らかである。特に後者では、舶来の植物は教養や品性のない人が一時的にもてはやすものであり、なくてよいものと断定している。『徒然草』では清少納言の『枕草子』を意識しながらも、唐物や唐めくモノを賛美する『枕草子』とは違った価値観が語られているのである。

いったいに兼好は保守的で、古風で自然なもの、日本古来の伝統や文化をいとおしむ傾向があり、珍奇な唐物趣味は彼の眉をひそめさせるものにほかならなかった。兼好が当時、流行していた茶に言及しないのも、そのためかもしれない。しかし、逆にいえば、『徒然草』にみられる兼好の保守的な警鐘の言葉から、当時いかに日元貿易が盛んであり、唐物が大量に流入し、もてはやされていたか、唐物崇拜の時代風潮もうかがわれるのである。

(河添房江「唐物の文化史」による)

〔注〕金沢貞顕——北条貞顕。鎌倉時代末期の政治家、文化人。

六波羅探題——鎌倉幕府が京都に設置した機関、またその長官。

上行寺——神奈川県鎌倉市にある寺。

六浦——神奈川県横浜市金沢区一帯。

漢籍——中国の書物。

東下り——京都から鎌倉へ行くこと。

『書経』の「旅葵」——古代中国の書物の一節。

『明月記』——藤原定家が漢文体で書いた日記。

石清水八幡の宗清法印——鎌倉時代の僧。石清水八幡は京都にある神社の名。

関白の近衛家実——鎌倉時代前期の政治家。関白は官職名。

貴顕——身分が高い人。

〔問1〕⁽¹⁾『徒然草』の次のような段が生まれたとあるが、ここで引用した『徒然草』百二十段から筆者はどのようなことを読み取ったか。その内容を次の□のように説明するとき□に当てはまる表現を本文中から九字で探し抜き出せ。

實用にならない中国からの高価な舶来品を人々がもてはやすのは、その背景に□があるからだ。

〔問2〕⁽²⁾「遠き物を宝とせず」とも、又「得がたき貨を貴まず」とも、文に待るとかや。とあるが、中国の古書がこのように言っているのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 遠方のモノや奇妙なモノは、名前も知れわたらず人々の心をまどわすばかりで親しみを感じさせないので、国家には不必要なものだから。
- イ 立派な君主であるならば、遠方のモノや人に頼らなくて済むように国内の産業を育成し、自国でモノ作りができる制度を整えるから。
- ウ 異国で苦勞して探し出し、はるかな距離を運んでくることによってモノの値段が高騰し、限られた裕福な人しか購入できなくなるから。
- エ 君主が未知のモノや珍しいモノを手に入れようともくろむと、人心が混乱し治安が悪化するため、人民が落ち着いて暮らせなくなるから。

〔問3〕⁽³⁾書籍の輸入に対して寛容かと思いきや、そうではないのである。とあるが、ここでの筆者の考えを説明したものととして、次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 薬の輸入は許容しながら書籍の輸入は禁じる兼好の考えに矛盾を感じ、釈然としなかったと筆者は考えている。
- イ 中国の書物に価値を見いだしている兼好が、書籍を輸入することに異を唱えたのが意外だったと筆者は考えている。
- ウ 兼好が書籍の輸入に際して内容によって有用と無用とに分けて扱っていることに、違和感を覚えたと筆者は考えている。
- エ 新たな書籍の輸入を停止し、国内の書籍の価値を高めたい兼好の意図が見通せて、不快に感じたと筆者は考えている。

〔問4〕⁽⁴⁾「富裕」とあるが、この熟語と同じ構成のものを、本文中の□線部をつけた次のアからエのうちから選べ。

- ア 産地
- イ 書庫
- ウ 重視
- エ 階級

〔問5〕 本文の内容に合致するものとして、次のうちから最も適切なもの
を選べ。

ア 異国から次々ともたらされる多様な舶来品は、その時代ごとに新しい
モノや思想を持ち込み、日本の文化に影響を与え続けた。

イ 鎌倉時代の富裕層の人々は圧倒的な経済力を背景に自らがこぞって中
国大陸に渡り、希少な書物や生き物を日本に持ち帰った。

ウ 都の裕福な人々が、外来の珍しい動物を競って飼う世の中の流れに踊
らされたことに対して、藤原定家は難色を示した。

エ 批評家としての吉田兼好は、藤原定家への対抗意識から、見慣れない
外国由来の動物の飼育に対して無関心を貫いた。

3

四

四

五

四